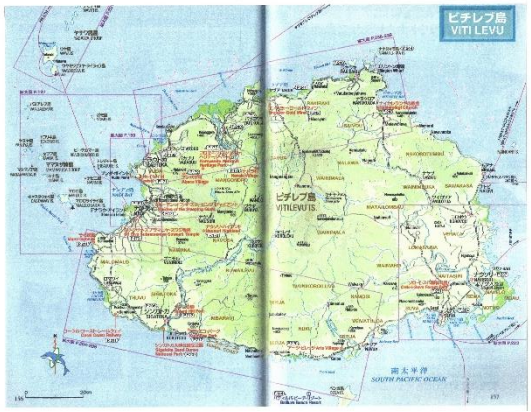
南海の楽園を訪ねて

古 川　眞 人

７月に「南海の楽園」「幸福の楽園」ことフィジーを妻と訪ねました。数年前から常夏の島でのんびりした時間を…、と探していましたが「○〇○楽園」に目が留まりフィジーにしました。

成田を午後９時半に発ち、ビチレブ島のナンディ空港に着いたのが翌朝の９時、時差３時間を考慮すると８時間半のフライトでした。機内では読んだ筈のガイドブックを何度も読み直し、「楽園とは…」を想像し期待に胸を膨らませているうちに到着。８ 時間半が短く感じたフライトでした。税関も無事通過、ワクワク気分でロビーに出ると頭の中が…？？、エッ…これがフィジー…？？。行き交う男女のデカイこと。背は高く、そして色黒で太った巨人が目前を遮るように往来する様に圧倒され、想像と異なる光景に唖然としたフィジー旅行の幕開けでした。



ビチレブ島（四国と同程度の面積）

気を持ち直し先ずはフィジーの文化を、と「フィジアン村ビレッジツアー」に参加しました。村に到着すると「Kava（カバ）の儀式」を受けることになりました。

村人の出迎え

この国では、来訪者に「カバ」という飲み物を伝統的な作法により振る舞うことで歓迎の意を表すとのことでした。その飲み物は乾燥した木の根を突き砕き、水を加えて絞った汁を「Bula（ブラ）」と言って飲み交わすというものでしたが、その汁の作り方はすべて手作業。素手で揉んで絞った土色の汁、衛生面が…？。差し出されたものの飲み込むのに勇気が…、味は緊張のせいか覚えていません。なおこの「ブラ」は、こんにちは、やぁ～、などの挨拶言葉で英語の「Hello」と同じ意味と思いました。

カバの儀式（中央木製の器でカバの汁を作る）

「カバの儀式」終了後、村内を見学しましたが小学生の授業中の集中力がないこと。我々に気付くと振り向いて手を振ったり、仲間に声かけて話したり、それを見ている先生は何の注意もなし。実に開放的…？。我国の授業とは大違い。授業内容を理解しているのかな…？、と疑問も…。

小学校の授業（何とも集中力がない生徒）

翌日はタクシーで熱帯植物園へ。乗車前に目的地および待ち時間を説明し料金を確認しましたが、運転手の都合で予定より早く帰ることになったので料金のダウン交渉、そして帰路では目的地の変更で再度交渉、結局当初の料金の７割弱になり、運転手から笑顔が消えたのがちょっと気になりました。その後路線バスで北部の第２の都市：ラウトカへ。到着後帰りのバス時間を確認し、観光・昼食を済ませ乗車したものの時間になっ

てもなかなか発車しません。乗客も平然とし苦情を言う気配もなし。しばらくして２人が乗り込むとやっと発車。乗車券は購入時に行先と時間を確認してから発券しますが、その時に時間を交渉できることが解りました。交渉次第では遅延も可能なのです。ただし希望の時間に遅れた場合は無情にも発車するとのこと。ほとんどは定刻に発車しますが、場合によっては交渉可能ということに驚きました。

翌日は約 200km 離れたフィジー第１の都市：スバ（首都）へ。急行バスに乗り景色を眺めながら快適に走っていると、突然座席下から「バァ～ン」と爆音。バスは急停車。運転手と車掌（男）は降りたっきり戻ってきません。数分経つと数人下車し様子見。私達も下車し作業様子を見てパンクと分りました。運転手と車掌がタイヤ交換しているところでした。約 30 分で交換終えると無言のまま発車。その間の説明一切なし。乗客からも何の苦情もないどころか、下車中には談話が始まる始末。なんとものんびりした国柄と感じました。なお談話の内容がタイヤは日本製と…。急な展開に焦り、我々に気が付く前に何かジョークはないものか…、と考えているうちに交換終了。ホッと胸をなでおろし座席へ。バスは何もなかったかのようにスバへ向いました。到着後、事故で滞在時間が短くなったので帰路のバスの発車時間を交渉。何とか 20 分遅延に成功。前日の経験が生かされた時でした。

市場（１f$ ≒70 円弱）

なお帰路は満席。妻とは別のシートに。私は太ったお尻の大きいフィジー女性と同席となり座席からお尻がはみ出す始末。不安定な状態で揺られ普段使わない筋肉を使った

ため疲れ倍増。パンクといい満席といいハプニングありのバス旅でした。

最終日はリゾート島へのツアーに参加しました。参加者は 60～70 人でしょうか？。乗船後、帆船の屋根に上がり日光浴をする人、デッキチェアーで読書する人、欄干に身を任せ潮風を受けながら景色を眺める人など様々で、思い思いの楽しみ方で過ごしていました。

クルージング

出港から 20 分ほどすると、海面を滑るように走り本島から離れていく様に合わせるかのように生演奏が始まり、そしてレストランも解放、なんと食べ飲み放題のクルージングの始まりです。そんな雰囲気に浸っていると 2 時間余で島に到着。島には小型船に乗り換えて上陸しました。ひと息つくや否や透明度抜群の海で珊瑚・熱帯魚観賞のシュノーケリング。泳いだ後は潮風の中で食べ飲み放題のＢＢＱ。お腹を満たしたところで砂浜のビーチチェアで日光浴。これぞ楽園…、とビールを友に…。

ナイス ！

そんな状況に浸ってウトウトしていると迎えの船が、慌てて乗り込んだところビーチサンダルを履いていないことに気づきました。が時既に遅し、島は遠くに…小さくなっていました。本島到着後、移動時の足裏が痛かったこと。楽園での緩んだ気が咄嗟の状況に対応できず大失態。他の観光客からは変な外国人と思われたかも…。なお観光客の国別ベスト 2 は①オーストラリア②ニュー

ジーランドで全体の 50%を占めるとのことでした。

　ホテル到着後、旅の仕上げとばかり近くのレストランへ。まずはフィジーを堪能して乾杯。肴は勿論幾多のハプニング。笑いの絶えない夕食でした。

　食後、夜道を千鳥足でホテルへ。とその時遠くの建物の傍にいた数人の塊の中から一人の女性がこちらへ…？、かのフィジアンレディーです。ネットで調べて頭にはありましたがまさかこんなところで…。こちらが夫婦？と判ると去りましたが、なんと一晩 50ｆ＄（3,000 円）とのこと。帰国後思い出すたびに次回は友人と...？？。

　フィジーは南緯 16°～20°に点在する 300 余の火山島と珊瑚礁からなる観光立国。 公用語は英語。「ブラ」の挨拶で誰にでも話しかける陽気さ、のんびりした生活、観光客に親切な人々。そうした中でゆっくり流れる時間を堪能した 6 日間でしたが「○○○楽園」をかじったところでの帰国は少々心残りでした。もしフィジーに興味を持ちましたら現地の人が勧める花咲く初夏がいいでしょう。